

特集 不便は手間だが役に立つ



便利すぎる世の中に足りないもの

不 便 益

科学技術が発展するにつれて、私達の生活は物質的には豊かに、便利になってきた。しかし、便利になり過ぎて、逆に失いつつあるものがある。そんな現代に一石を投じている川上先生にお話しを伺った。

不 便 益 と は ？

「不利益」という言葉は聞きなれない響きだと思えます。不利益とは、読んで字の通り、不便にすることで得られる益や価値のことです。ただし、私の不便の定義は一般的なものより狭くしています。日本語の辞書だと、便利とは「思い通りになること」と書かれており、不便は「思い通りにならないこと」です。これだとちよつと意味が広すぎるので、分かりやすくするために、「手間をかけたなり、頭を使うこと」を不便の定義としました。

つまり、不利益とは「あえて手間かけたり、頭を使うことで得られる益」のことです。これだけだと、まだ不利益がどのようなものか分かりにくいと思いますので、いくつか例を挙げてみましょう。

みんなで白熱した議論をして、ホワイトボードに書きなぐったものは記憶に残るのに、きれいなワープロに清書したとたん、あれは何だった

だろうと薄れてしまうことがあると思えます。

正確に情報を伝えるには、ワープロで印字された文字は識別性が高く、読みやすいです。一方、不利益の視点から本当に伝えたい情報は何かと、もう少し踏み込んで考えると、人が手間をかけて書いた読みにくい文字という不便には、記憶に残りやすいという価値があると思えます。

車の運転で、オートマチック車(AT車)とマニュアル車(MT車)を比べてみましょう。AT車はMT車に比べて変速を意識したり、操作したりする手間が必要ないため、非常に便利です。それにもかかわらず、MT車を運転する人は少なからずいます。その人たちは、あえて手間をかけることによつて、車を自分で動かす感覚を得るといふ満足感を得ているのです。

右記のことを読むと、不利益は懐古主義なのかと思う人がいるかもしれませんが、そこで、もう二つ例を挙げましょう。

あえて手間をかけ 新たな価値を生み出す

工業生産の方式には、ライン生産方式やセル生産方式があります。ライン生産方式は一人が作業の一部を分担する、いわゆる流れ作業の生産方式です。一方、セル生産方式は一つの製品を一人(または数人)で全部を作り上げる生産方式です。

昔はライン生産方式が主流でしたが、ある時期からセル生産方式の導入が相次ぎました。それは、少量多品種生産に向いているからというのが一つの理由でした。

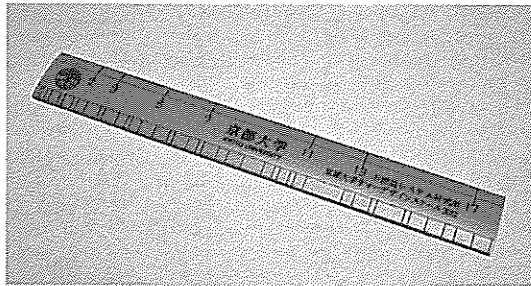
しかし、実際に現場を見てみると、自動車や多機能で複雑な複合機を、一人で組み立てられるのがうれしい、かつこいといつた達成感や満足感を感じる。そして、さらに腕を磨き上げることで、多能工の能力向上につながっているという理由もありました。

あえて、一つの製品の製造方法を覚えるという手間をかけることによつて、そのような益が得られるのです。



川上浩司 (かわかみ ひろし)

1964年生まれ。京都大学工学部修士課程修了後、岡山大学の助手をしながら博士号を取得。恩師であり、システム工学の権威である片井修教授のもとで、研究を続ける。ある日、片井教授の「これからの時代は不利益だ」という一言をきっかけに、不利益の研究を始める。現在は、京都大学の大学院横断教育プログラム推進センター/デザイン学リーディング大学院の特定教授として、不利益の研究および普及に努めている。



学生が考案し、京都大学の生協で人気土産となった「素数ものさし」。目盛りには、素数（1とその数でしか割れない自然数）しか書かれていないため、とても不便です。工夫を凝らさないと長さが測れません。例えば、このものさしで12cmを測るにはどうすればいいでしょうか。

でも、それで必ず益があるかというところではありません。自分でやる達成感とか、自分が中身を知っている、確実に無農薬といった安心感、満足感というのは、効率化や自動化とは無関係です。

英語で「不便益をいうと Benefit of Inconvenience」、略してBI。AIによる知能の代替や労働の削減を横軸に、達成感や満足感などのBIを縦軸に、グラフを描きます。

高度経済成長期では、右に行けば、上に行くというのが信じられていま

以上のように、単に古い時代の技術を使うという、昔に帰れといった発想ではなく、あえて人間が手間をかけることで、新しい価値を生み出すことが不便益です。

まだ、不便益がどのようなものか分かりづらい人もいるかもしれませんが、不便益の分かりにくさも、不便益のおもしろいところですよ。

説明書や論文と、俳句だと、読んで面白いののは俳句ですね。多様性があるほうが楽しいです。説明書や論文は誰が読んでも同じようにしか読めないからつまらないのです。それって本当は何なのだろうと突き詰めて行くとなかなか答えがでなくて、みんなの議論の種になるというのが、面白いのかもしれない。

不便益自体が不便益なのです。

でも、それで必ず益があるかというところではありません。自分でやる達成感とか、自分が中身を知っている、確実に無農薬といった安心感、満足感というのは、効率化や自動化とは無関係です。

英語で「不便益をいうと Benefit of Inconvenience」、略してBI。AIによる知能の代替や労働の削減を横軸に、達成感や満足感などのBIを縦軸に、グラフを描きます。

高度経済成長期では、右に行けば、上に行くというのが信じられていま

近年、科学技術の発展、特に最近ではAIが話題になっていきます。しばしば、AIと不便益の関係性を聞かれることがあります。AIと不便益は対立

自分でするから得られ、また自動化しすぎたら失ってしまう達成感や安心感もあることが分かっています。たので、AIとBIは独立な方向で考えられると思います。

だから、AIを開発するなどはいけません。AIを開発して、右に行くことによっても、右に行けばいいです。けれども、右に行くことで、下がって

今後は不便益の意味を明確にして、不便益をさらに広めることで、世の中を豊かにして行きたいと考えています。懐古主義ではない、昔に帰れではないというだけでなく、何か新しい方向性を作って行きたいです。AIとBIの関係性もその一つだと思っています。

例えば、会社に何か提案したときに、「この提案は手間が省けないから、右側に行かないからボツ」と言われるのが今の風潮です。でも、手間を省いたら益が下がることがあるし、手間を掛けたら上がることもあるというところが常識になったら、右に行かないだけでボツにされることなく、社会になって欲しいです。そのために、工学の分野だけでなく、いろいろな人々との交流を続けて行きます。

(文聞き手 和田孔之)

以上のように、単に古い時代の技術を使うという、昔に帰れといった発想ではなく、あえて人間が手間をかけることで、新しい価値を生み出すことが不便益です。

まだ、不便益がどのようなものか分かりづらい人もいるかもしれませんが、不便益の分かりにくさも、不便益のおもしろいところですよ。

説明書や論文と、俳句だと、読んで面白いののは俳句ですね。多様性があるほうが楽しいです。説明書や論文は誰が読んでも同じようにしか読めないからつまらないのです。それって本当は何なのだろうと突き詰めて行くとなかなか答えがでなくて、みんなの議論の種になるというのが、面白いのかもしれない。

不便益自体が不便益なのです。

近年、科学技術の発展、特に最近ではAIが話題になっていきます。しばしば、AIと不便益の関係性を聞かれることがあります。AIと不便益は対立

自分でするから得られ、また自動化しすぎたら失ってしまう達成感や安心感もあることが分かっています。たので、AIとBIは独立な方向で考えられると思います。

だから、AIを開発するなどはいけません。AIを開発して、右に行くことによっても、右に行けばいいです。けれども、右に行くことで、下がって

今後は不便益の意味を明確にして、不便益をさらに広めることで、世の中を豊かにして行きたいと考えています。懐古主義ではない、昔に帰れではないというだけでなく、何か新しい方向性を作って行きたいです。AIとBIの関係性もその一つだと思っています。

例えば、会社に何か提案したときに、「この提案は手間が省けないから、右側に行かないからボツ」と言われるのが今の風潮です。でも、手間を省いたら益が下がることがあるし、手間を掛けたら上がることもあるというところが常識になったら、右に行かないだけでボツにされることなく、社会になって欲しいです。そのために、工学の分野だけでなく、いろいろな人々との交流を続けて行きます。

(文聞き手 和田孔之)

近年、科学技術の発展、特に最近ではAIが話題になっていきます。しばしば、AIと不便益の関係性を聞かれることがあります。AIと不便益は対立

自分でするから得られ、また自動化しすぎたら失ってしまう達成感や安心感もあることが分かっています。たので、AIとBIは独立な方向で考えられると思います。

だから、AIを開発するなどはいけません。AIを開発して、右に行くことによっても、右に行けばいいです。けれども、右に行くことで、下がって

今後は不便益の意味を明確にして、不便益をさらに広めることで、世の中を豊かにして行きたいと考えています。懐古主義ではない、昔に帰れではないというだけでなく、何か新しい方向性を作って行きたいです。AIとBIの関係性もその一つだと思っています。

例えば、会社に何か提案したときに、「この提案は手間が省けないから、右側に行かないからボツ」と言われるのが今の風潮です。でも、手間を省いたら益が下がることがあるし、手間を掛けたら上がることもあるというところが常識になったら、右に行かないだけでボツにされることなく、社会になって欲しいです。そのために、工学の分野だけでなく、いろいろな人々との交流を続けて行きます。

(文聞き手 和田孔之)

